

やってみよう！事例研究

事例報告（研究）のすすめ

令和7年9月16日

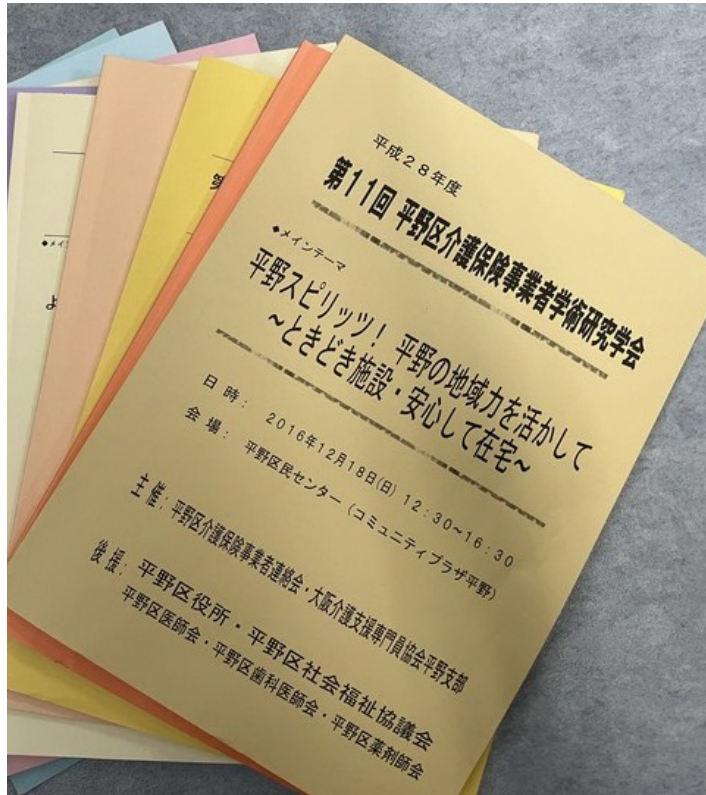
ハピネス訪問看護ステーション
統括所長 立石容子

学会発表、研究、論文・・・。
確かに大変ではありますが

たった一人の経験でも振り返り
その経験を「学び」と「知」に変える
それが、事例報告の良さだと思います・・・。

在宅ケアに携わる多くの支援者の経験を
共有できれば、きっと質はグンと向上するはず。
本日の話は独学の部分が多く含まれますが
「やって見よう！」とだけいただければ幸いです。

平野区では・・・。



○介護保険事業者学術学会を2006年度より毎年開催

○Covid-19で一旦演題発表取りやめ
➢今年度より少しずつ復活

○過去の演題発表者は90名以上

ケアマネジャー、介護福祉士、訪問看護師、理学療法士、 デイサービス、グループホームなど様々

○コメンテーターに大学教員を招請し、学びを深めるなども行った

何故、事例発表(研究)をするの？

日常の臨床実践を検討する大切さ

- 事例発表(研究)の良さはリアリティにある.
⇒平均(群対象の研究)で表せない事例の詳細を表現できる.
- ケア実践者の実践・思考過程を明確化する.
⇒報告者の思考を鍛え, 内省を促す.
⇒他者には, 報告者の工夫や思考が分かる.
- ケア実践者の実践能力の向上につながる.
- 対象者へのよりよいサービスの実現につながる.
- 様々な仮説と, その後の集団対象研究の源となる.

事例“報告”

今回はこちらの説明です

発見や気づきを他者に知らせるため、あくまでその事例の持つ問題点の指摘など、研修的意図が強い。⇒後方視的報告が多い

事例“研究”

研究疑問からスタートし、答えを探索するあるいは、新しい仮説を抽出する。新しい技法の実践、現行理論(学説)の検証、新しい解釈(見解)など。⇒前方視的研究が多い

振り返りの重要性

私たちの毎日の実践には気づきがあり、その気づきの蓄積が、経験から生み出される能力となる

振り返って考えて見れば……。

Aさんはこうだった。

Bさんもこうだった



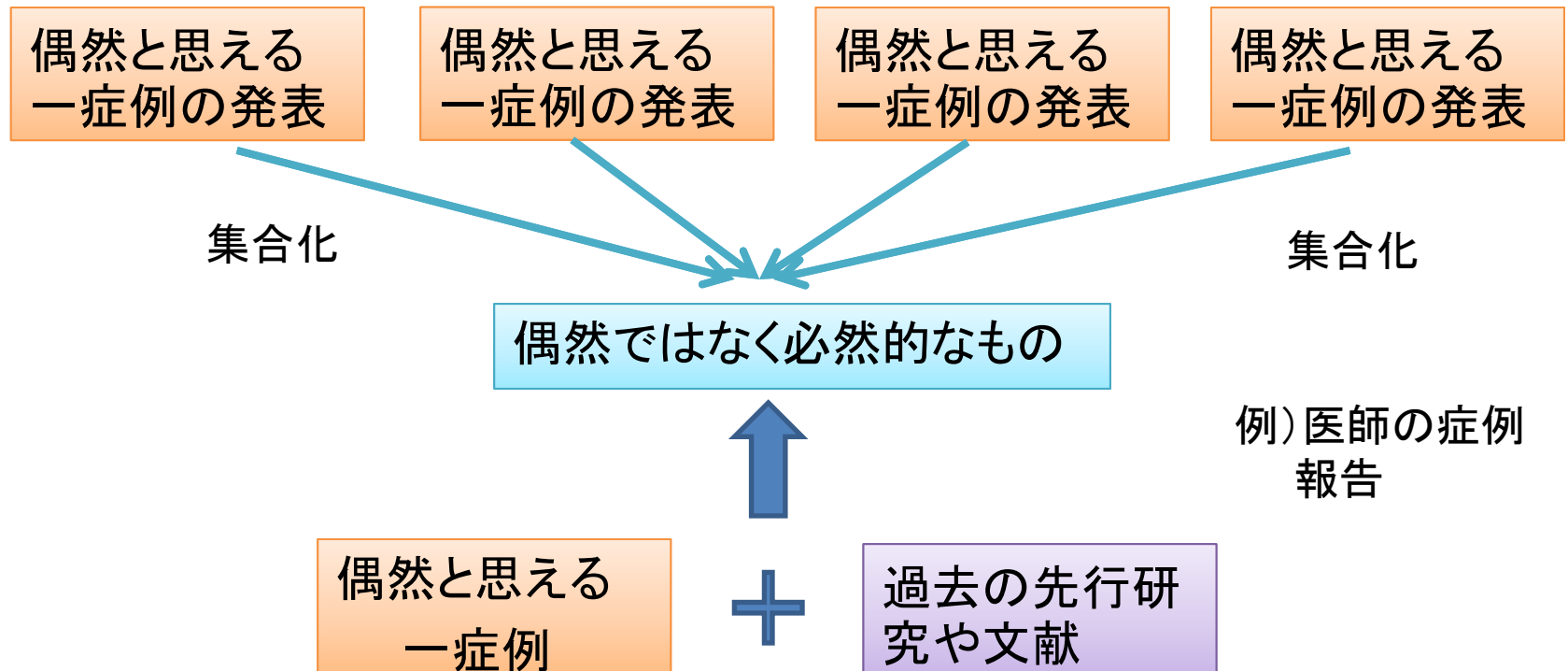
だから〇〇には、こんな傾向がある

「なんとなくそうかもしれない」の気づきを放置せず、しっかりと振り返ることで、少ない症例数であっても、確実な自己の知識となる。

集合化の必要性

体験による知識は、一人のものにしておいても他者には全く役立たない。

学会や論文等の機会で発表し、集合していくことで個人の知識が全体の知識となる



標準化(一般化)の重要性

⇒標準化(一般化)とは

- 物事や事柄を 統一したり、単純化、秩序化したりすること
- 標準化することで、教育が簡単になり、誰がしても、いちいち考えなくとも、すばやい処理ができ、かつ結果も期待できます

何故人は研究するのか？



標準化(一般化)を目指す

こんな小さな発見を発表なんて仕方ない？

「こんな小さな発見なんて・・・。」そんな風に考えないで。

在宅ケアに関わる皆さんの発表が少ないからこそ、今、「知識」の蓄積が必要！

是非、現場の「経験」と「知」を集合させ
一人の「知」を皆の「知」へ……。

一人の「知」を全員の「知」に
それが、全体の質向上の第一歩

では取り組んで見よう！

1. どんな症例を選ぶの？

○成功した症例

○完結した症例

全く分からないときは

○心に残った症例

を選びます

○成功した症例

人は自分のミスやまずかったことなどに目を背けたくなるもの。不成功の症例は、振り返れば、まずかったことが、満載。しっかりと向き合い振り返ることをしなくなる。

○完結した症例

現在進行中のケースは、結果がないために振り返りが難しい。すでに結果が存在する症例を

○心に残った症例

心に残ったということは、あなた自身になにかの気づきがあったから……。何故、心に残ったのか？ 思いをめぐらせるとその理由(テーマ)が見つかりやすいでしょう

2. どこに焦点をあてるのか

在宅ケア療養者の経過は、病院入院者などとは異なり、対象となる期間が長いため、どこに焦点を置けばよいのか分からなくなることがあります。

焦点の当たらない報告

⇒2年も3年もの経過をだらだら書き。焦点も当たっていないため分析もできない。

焦点が絞られた報告

⇒焦点が絞られれば、その点に集中して分析ができる。

2-2 どうやって焦点を絞ればいいのか？

○自分への問いかけ。「何故？」「何が？」を活用する

「何故(何が)、この症例を発表に選んだのか？」

「何故(何が)、この症例が自分の心に残ったのか？」

「何故(何が)、この症例に思い入れがあったのか？」

「何故(何が)、この症例はうまくいったのか？うまくいかなかったのか？」
など

2-2 焦点をぶれさせずに振り返りをするには？

○「環境」「プロセス」「関わり」「関係性」などに分解して、結果を導き出した理由を分析していく

どういう「環境」「プロセス」や「関わり」「関係性」があったから成功に導けたのか、又は、このような結果となったのか？

支援者としての自己の関わりや自己の関わりのプロセスは、常に重要な視点となります

3. 研究における論述の構成

研究発表、論文には、論述していく上で、構成があります。4コマ漫画の起承転結のようなものです。

例)

- 1) はじめに
- 2) 目的
- 3) 方法
- 4) 倫理的配慮
- 5) 結果(経過・成績)
- 6) 考察
- 6) 考察のまとめ
- 7) 結語
- 8) おわりに など

○左は、論述していく構成の例です。

○必ずしも、全てが必要ではありません

○1)を2)に置き換えたり
6)と7)を統合してしまったり、
いろいろなパターンがあります。

4. 構成上のルール

はじめに	この研究を行うにいたった背景などを書く。ここで文献は大活躍する。
目 的	どのような目的で研究を行うのか
方 法	どんな方法で行ったのか
結果(成績)	症例報告では、ここに焦点をあてた経過やプロセスなどを記載
考 察	結果から導き出された考察を書く ※注意:結果と考察は交えないこと
結 語	最終的にこの研究で言えることをここにまとめる。(ここを読めばすべてがわかる)
おわりに	研究結果に基づかないが、さらに言いたい事があればここにまとめる

5. スライドのイメージ図を描く

私が、発表を行うときは、まずは、スライドを手で描きます。

昔は6分、8分の発表が多く、スライド枚数が規定されている学会が多くありました。

10枚、または多くても16枚。(今回は10枚として)10枚の絵を描いていくのです。

するとイメージ作りがしやすくなります。

こうすることで、何を省き、何を追加すべきが分かります。

演題タイトル 氏名○×△子	成績2
目的	考察1
方法	考察2
事例紹介	考察3
成績1	結語

6. イメージ図を根拠を持った内容に変換させていく

ここからは、パワーポイントやワードを駆使してコツコツ作業を行っていきます。とにかく「書く」ことです。

オーディエンスが理解できる内容かどうか、同僚に見てもらいながら、論述を確立していくのもよいでしょう。

根拠があいまいな場合は、先行研究などの文献を活用するとよいでしょう。

行き詰ってしまったら・・・

この当たりできっと初心者の皆様は行き詰まりを感じてしまうはず・・・第2段階の自分への問いかけを再度行っていきます。

指導者がいれば(同僚でもOK)、見てもらいながら、ディスカッションで考えをまとめていったり、偏った視点を広げたり効果的な方法です。

指導者は、その専門分野に長けている経験のある方がよいでしょう。あなたの何故？どうして？の答えを経験者として知っているからです。

文章は完結明瞭に

- 長すぎる文章は、他者にとってわかりづらいものです。できる限り無駄な言葉を省き、完結明瞭にしましょう。
- インパクトを与えるために、図表を用いる工夫もできます。
- 口演では、言葉で補うことも可能です。

7. 読み原稿を作成する

そろそろスライドが出来上がってきたら・・・

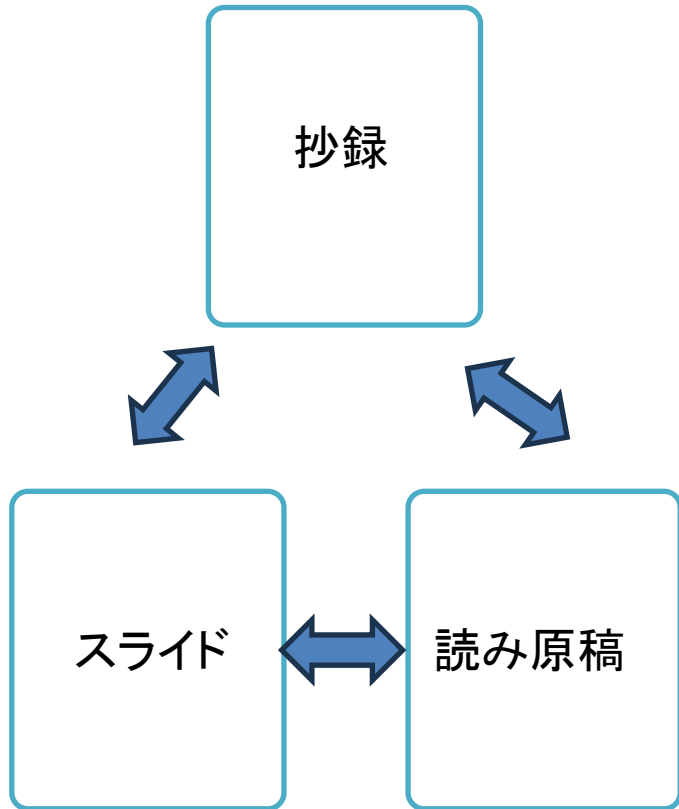
読み原稿を作成します。読むのはかっこ悪い？なんて思う必要は全くありません。

限られた時間で、効果的に効率よく発表していくには、必須のアイテムです。読み原稿は、スライドの補足内容を充実させることが出来ます。

そして、その中で、スライドへの記述不足や、内容の不明瞭さが明らかとなることもあります。

あとは、「スライドの修正」と「読み原稿」との間を行ったりきたり、何度も繰り返すことで、内容はさらに充実してきます。合わせて抄録も振り返り、まとめる作業を行います。

作成手順の例 (抄録・スライド)



①抄録を書いてみる

②抄録はほどほどに、スライドのイメージ作成へ

③ ②に基づき スライドを作り始める
はじめに又は目的、結語は早めに書く

④全てのスライド大まかにできれば、次に抄録の
完成を目指す

⑤スライドの完成を目指す

⑥読み原稿を作る

⑦スライドの手直しをして、スライドを完成させる

努力は結果を生む！



発表者の声

「つらかったああ～」

「でも、こんなに一つの事例を振り返ったのは初めて」

「気づかず経験的に行っていた支援。でもそこには実は根拠があったんだ…。ということに気づかされた。」

「最後まであきらめず取り組んでよかった」

「またいつか発表してみたい」

平野区介護保険学術研究学会、発表者のアンケートより

8. 発表の方法

いざ発表！とはいっても、発表はとっても緊張するもの。そしてその後の質疑応答も怖～い時間。でも、たくさんのコツがあるんです。

ここまできたら、準備万端に。盛大な拍手で終われるよう、手抜きはしない。

発表のコツは別紙で・・・。

オーディエンスも、指導者も、 一体化して学会発表に学ぶ

○聞く側の姿勢

発表者の努力を称える気持ちで聞く
質問や意見は、批判ではなく建設的に

○指導者の姿勢（モラル、熱意）

途中での投げ捨ては禁物
作成のプロセスはとにかくつらいもの。
「貴方のやってきた支援はすばらしい！」と
発表者を励まし続ける。自信を持たせる。
最後まであきらめずに二人三脚で完成させる

おわりに

いかがでしたか？ やって見ようって気になりましたか？

「学術のないところに発展はなし。」それは私の師匠の言葉でもあります。

皆と一緒に学びあう。自己も成長する。そこにはちょっぴり努力も必要。

努力は結果。結果は努力。

です。そう自分に言い聞かせて、一緒に精進していきましょう。

注 釈

今回の説明は、過去の指導経験によるものであり、正しいかどうか？については、指導者により異なりますのでご注意ください。

